

天に日月あり、地に山川あり、万物を曲成して遺さず。禽獸草木、各々其の性命を保つ者は、一陰一陽其の道を成し、一寒一暑其の宜しきを得るを以てなり。諸を弓馬に譬ふ。弓に一張一弛有りて而して恒に勁く、馬に一馳一息ありて、而して恒に健し。弓に一馳無ければすなわち必ず撓み、馬に一息無ければ則ち必ず殫る。是れ自然の勢なり。

夫れ人は万物の靈、而して其の或は君子たり、或は小人たる所以の者は何ぞや。其の心の存すると存せざるとに在るのみ。語に曰く、性相近く、習相違ざかると。善に習ぶときは則ち君子と為り、不善に習ぶときは則ち小人と為る。今善を以て之を言へば、四端を拡充して、以て其の徳を修め、六芸に優游して、以て其の業を勤む。是れ其の習則ち相遠ざかる者なり。然れども其の氣稟或は斉しきこと能はず。是を以て屈伸緩急相待ち、其の性命を全ふする者は、夫の万物と何を以て異ならんや。故に心を存し徳を修め、其の万物と異なる者を養ふは、其の性に率ひて、而して形を安んじ神を怡ばしむる所以、その万物と同じき者を養ふは、其の命を保つ所以なり。二者皆其の節に中らば、善く養ふと謂うべし。故に曰く、苟も其の養を得れば、物として長ぜざるはなく、苟も其の養を失ばば、物として消ぜざるはなしと。是れも亦自然の勢なり。然らば則ち人も亦弛息なかるべからざるや固よりなり。嗚呼孔子の曾点に与せる、孟軻の夏諺を称せる。良に以あるなり。

果たして此の道に由らば、則ち其の弛息して、形を安んじ神を怡ばしむること將何の時にして可ならんや。必ず其れ華農に吟咏し、月夕に飲齋する者は、文を学ぶの余なり、鷹を田野に放ち、獸を山谷に驅る者は、武を講ずるの暇なり。

余嘗て吾が藩に就き、山川を跋渉し、原野を周視し、城西に閭閻の地有るに値う。西は筑峯を望み、南は仙湖に臨み、凡そ城南の勝景、皆一瞬の間に集まる。遠巒遙峰、尺寸千里、翠を攢め、白を畳み、四膽一の如し。而して山は以て動植を發育し、川は以て飛潜を馴擾す。洵に知仁一趣の樂郊と謂ふべきなり。是に於

て梅樹数千株を芸^うゑ、以て魁春の地を表す。又二亭を作り、好文と曰ひ、一遊⁽²⁰⁾と曰ふ。晉^{ただ}に以て他日芟⁽²¹⁾憩の所に供するのみに非ず。蓋し亦国中の人をして、優游⁽²²⁾存養する所有らしめんと欲するなり。国中の人、苟^いしくも吾が心を体し、夙夜懈^{おこた}らず、既に能く其の徳を修め、又能く其の業を勤め、時に余暇有るや、乃ち親戚相携へ、朋友相伴^{ともな}ひ、悠然二亭の間に逍遙し、或は詩歌を倡酬⁽²³⁾し、或は管弦を弄撫⁽²⁴⁾し、或は紙を展べて揮毫⁽²⁵⁾し、或は石に坐して茶を点じ、或は瓢樽⁽²⁶⁾を花前に傾け、或は竹竿を湖上に投じ、唯意の適する所に従ひ、而して弛張⁽²⁸⁾乃ち其の宜しきを得ん。是れ余が衆と衆を同じうするの意なり。因りて之に命じて偕樂園と曰ふ。

天保十年歲己亥に次^ひる夏五月建つ 景山撰並書及題額⁽²⁹⁾

禁 条

- 一、凡そ園亭に遊ぶ者卯に先だちて入り、亥に後れて去るを許さず。
 - 一、男女の別宜しく正すべし、雑沓以て威儀を乱すを許さず。
 - 一、沈醉^や謔暴及び俗楽も亦宜しく禁ずべし。
 - 一、園中梅枝を折り梅実を采^とるを許さず。
 - 一、園中病無き者は輜^{かじ}に乗るを許さず。
 - 一、漁獵禁有り制を踰^こゆるを許さず。
- (原漢文)

《語釈》

- (1) 曲成……変に乗じ、物に応じてつぶさにひとつびとつになすこと
- (2) 性相近く、習相違ざかる……天より享けた生まれつきは、人々相似てはいるが教育習慣により遠く賢愚の別を生ずる。論語陽貨篇に見える
- (3) 四端……仁義礼智のこと
- (4) 六芸……礼楽射御書数をいう
- (5) 氣稟……生まれつき
- (6) 苟くも其の養を得れば、物として長ぜざるはなく、苟くも其の養を失はば、物として消ぜざるはなし……いやしくもそれを正しく育てていけばどんな物でも生長しないものはなく、いやしくも正しく養うことをしないならばどんな物でも消え失せてしまわないものはない。孟子告子章句上編に出ず

- (7) 曾点…… 孔子の弟子曾子の父
- (8) 孟軻…… 孟子
- (9) 夏諺…… 夏の時の諺
- (10) 華農…… はなのあした
- (11) 飲巖…… さかもり
- (12) 闔谿…… 開けた谷
- (13) 遠巒遙峰…… 遠くにつらなる山々や遙かな峰々
- (14) 尺寸千里…… 近くから遠くまで
- (15) 翠…… みどり
- (16) 白を畳み…… 雲が重なったさま
- (17) 四膽…… 四方まわり
- (18) 飛潜を馴擾す…… 魚類などを養うこと
- (19) 知仁一趣…… 山の美しさと、水の美しさを一望のもとに集めた、
論語擁也編に「知者は水を楽しみ仁者は山を楽しむ」とある
- (20) 一遊…… 孟子梁恵王章句下編に「夏諺に曰く吾が王遊せずんば吾何を以て
か休せん。吾が王豫ばずんば、吾何を以てか助からん、と。一遊
一豫諸侯の度と為る」と出ず
- (21) 茨憩…… 宿泊したり休憩したりすること
- (22) 優游存養…… ゆつたりとしてその本性を養うこと
- (23) 倡酬…… やりとりをすること
- (24) 弄撫…… もてあそぶ
- (25) 揮毫…… 筆をふるい書画をかく
- (26) 瓢樽…… ひさご
- (27) 竹竿…… たけざお
- (28) 弛張…… ゆるめることとはること
- (29) 景山…… 烈公德川斉昭
- (30) 卯に先だちて入り、亥に後れて去る…… 卯・亥は時刻を表す。

「この文章も斉昭公の自作自書で、石に刻まれて借樂園の中に建っている」